

第6回マイケル・ノーベル・サステイナビリティ・テクノロジー・シンポジウム 開催報告

日時：2017年11月9日

場所：東工大蔵前会館3階手島精一記念会議室

テーマ：持続可能な社会に貢献する水素技術の役割

日本がリードする最新の水素利用技術、水素輸送技術、水素エネルギーシステム構想を発信し、持続可能な社会への手がかりを提示する。

最初にマイケル・ノーベル博士が基調講演を行い、自身が主催する **Nobel Sustainability Trust** を紹介した。

トヨタ自動車からは燃料電池自動車（FCV）開発の経緯についての講演があった。自己加湿法や低温（-30℃）起動法など多くの工夫と努力がFCV「ミライ」には詰まっている。パナソニックからは「家庭用燃料電池パナソニック ENE-FARMの開発状況」についての報告があった。国内での普及が年々進み、2017年には20万台を突破した。純水素を使う燃料電池も開発中で、太陽光発電から水素を製造するカーボンフリーシステムの提供も間近い。

東工大岡崎特命教授は、同教授がリーダーを務める「グローバル水素エネルギー研究ユニット（GHEU）」と産学連携コンソーシアム（GHEC）を紹介した。同研究ユニットは日本のエネルギー消費の20%以上を水素で賄う大規模水素システムを目指している。広瀬九州大学 WPI 招聘教授はビデオ参加し、最近欧州で発足した「Hydrogen Council」を紹介した。同カウンシルでは世界をリードする企業のCOEが集い、水素へのエネルギーシフトを促す。

パネルディスカッションはインドから参加のKumar氏を含めて、国際協力の推進法を議論した。ディスカッション後、パネラーが覚書（MOU）を作成した。

